広島原爆 語り継ぐ（下）

元県在住被爆者

進む高齢化に抗して

他者の体験伝承活動

「一緒に学校に向かっていた友達に『もう歩けん。あんた一人で行きんさい』と涙をためた目で強く言われました。火が迫ってきて熱くてとどまっていられないので、心を残しながら一人で逃げてしまいました。このことがずっと心に残っています」―。広島平和記念資料館の一室で8月、小泉喜代子さん(74)＝広島市佐伯区＝が淡々と語る。

被爆者の高齢化が進む中、「他人」の体験を伝える被爆体験伝承者として活動する小泉さん。凄惨（せいさん）な場面に、来館者から時折はっと息をのむような声が漏れた。小泉さんは「機会があれば、（かつて暮らした）愛媛に証言をしに行きたい」と話す。

2012年度から市が始めた伝承者養成事業では、伝承者と希望する証言者が組み、3年間の研修後に資料館の定時講話や学校などで引き継いだ証言を語る。

小泉さんは知人に誘われ「ピースボランティア活動の勉強になるかも」と1期生として参加。「この人しかいない」と、50年以上にわたり国内外で被爆証言をしている先駆者の一人、松原美代子さん(85)の伝承者になると決めた。

2歳で被爆した小泉さんは、長く被爆者であることを明かさず生きてきた。転機が訪れたのは、夫の転勤で松山市で暮らしていた40代後半。目の異変をきっかけに被爆者健康手帳を申請し、被爆者として手当をもらい始めたこともあり「恩返しと使命感から何かしたい」と考えが変わった。

広島平和記念資料館の定時講話で伝承者として被爆体験を語る小泉喜代子さん＝8月、広島市

小泉さんには「記憶のない2歳で被爆した私が被爆者と言えるのか」との迷いもあった。学徒動員の作業中に爆心地から1・5キロ地点で被爆した松原さんの証言に併せて自分の体験も語ることで「被爆者でも伝承者でもある私だからこそ伝えられることもある」と考えるようになった。ピースボランティアの研修期間に戦中戦後の世界情勢などを学んだ結果、「戦争で日本がどんなことをしてきたかも知った」と新たな視点も得た。

被爆者の中では若い世代になるとはいえ、小泉さんは70代後半に差し掛かった。松原さんも体調の悪化のため、自身で証言することが難しくなっている。小泉さんは「いずれは被爆者から話を聞けなくなってしまう。少しでも長く活動を続けたい」。広島を訪れる人に思いをつなぐ。

（河端渉）

愛媛新聞 :朝刊 2017/09/19 面名:二社 ページ:004

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。